

改造ニ際シ濕壓及往復部ノ作用其飛輪ノ制御ニ堪マヘキヤ否ヲ確定
スベシ然ラザルトキハ撞響或ハ軸ベヤクシノ片耗カダスレヲ醸ス是第三ナリ此數件
ヲ考慮シ面シテ改正ヲ行フトキハ廢機關ヲ變シテ其機トナシ日ニ燃
料ノ幾分ヲ減スルヤ瞭然ナリ其改進費ノ如キハ數月間ノ省燃料ノ實
價ヲ以テ之ヲ償フコ足ラン

○左ノ一編ハ數月前ノ寄送ニカ、リ既ニ出版可有筈ナリシカ有故テ
今迄延引セリ
編輯委員誌

鐵道建築資本金ヲ論ス

十六年三月

在信濃 杉山輯吉稿

夫レ鐵道ハ人智開達有無流通殖產興業ニ緊要ナルノミナラス兵政上
ニモ亦タ必用ナルハ近時我國輿論ノ歸着スル處ニシテ既ニ日本鐵道
會社ノ設立アリテ其線路無慮五百英里ヲ撰定シ之ヲ四區ニ別テ其第
壹區ナル東京高崎間ノ布設ハ昨年六月ニ於テ武州川口ヨリ起工シ近

英里開業
 ソノ先二
 十英里モ
 已ニ落成
 ニ赴ケリ
 東北鐵道
 會社
 越前阪井
 湊ニリ金
 澤ヲ經テ
 越中富山
 及ヒ伏木
 ニ至ルノ
 計畫
 卷 四 廿 第 誌 叢 學 工

日熊谷迄ノ開業アラントス又々東北鐵道會社ハ越前敦賀ヨリ加州金澤地方ニ布設セント既ニ其線路ノ測量モ略ホ整頓シタル由又々信越鐵道會社ノ如キモ近頃漸ク結社ノ運ヒニ至リ越後高田ニ事務所ヲ設ケ上州高崎ヨリ信濃ヲ經テ高田直江津港ニ其線路ヲ連絡セント之レガ計畫ヲ爲セリ其他各地有志者ノ鐵道布設ヲ議シテ軍備擴張ト共ニ内地ノ改良ヲ計リ國家ノ基礎ヲ堅牢ナラシメントスルハ常ニ各新聞紙ノ報道スル處ニ據テ之ヲ知ルベシ蓋如此ク世人熱望ニ堪ヘサル鐵道布設ノ業ニシテ實地起工ニ遅々タルハ何ソヤ余輩實ニ遺憾ニ堪エス否ナ遠ク前途ヲ洞察スル有識者ニ在テハ獨リ心中ニ苦慮スルヲナラソ願フニ本業ノ斯ク延引スルモノハ畢竟二大原因ノ存スルアツテ然ルモノナリ則チ第一ハ事業ノ宏大ニシテ費額ノ巨多ナルガ爲メ人民ハ容易ニ之ヲ負擔シ能ハサルニ由ルヲ第二ハ現時我國金利ノ高クシテ收支ノ相ヒ償ハサルヲ恐レ之ニ資本ヲ投スルモノナキヲ余輩之

ナ熟考スルニ此二大原因アリテ本業起工ノ障礙ヲナス以上ハ決シテ
 之ヲ望ムベキトニアラス余ハ斷シテ曰ハシ如此宏大無邊ナル公共有
 益ノ事業ハ政府ニテ之ヲ起シ以テ厚生利用ノ大計ヲ爲スベシト
 然レハ政府ニテ之ガ起工ニ着手スルトモ決シテ民立ノ發起ヲ消滅ス
 ベシト云フニアラス民間ニテ計畫アルキハ充分ニ之ヲ保護シテ成工
 セシムルハ勿論ノトナリ政府之ニ着手スルハ民間ノ事業ヲ妨碍スル
 ノ意ニアラス唯々鐵道布設ヲシテ神速ナラシムルニアルノミ
 如此論シ來ラハ皮相ニ經濟ヲ稱道スル論者ハ必ス曰ク政府ノ工ヲ起
 シ若シクハ民間ノ事業ヲ保護スルハ不當ニシテ且ツ有害ナリ其然ル
 所以ノモノハ我國ノ富未タ此ノ如キ大業ヲ起スニ足ラス殊ニ目下ノ
 如キ資本匱乏ノ際ニモ拘ラス之ヲ起サハ忽チ資本一局部ニ集リ其配
 當ノ權衡ヲ失シ緊要的ノ資本ヲ不急的ニ浪費スルニ至ル此レ豈ニ策
 ノ得タルモノナランヤ況ンヤ鐵道ハ現今我國社會ノ利益ナキモノナ

ルニ於テチヤ見ヨ百貨幅濶往來織ルカ如キ關東ノ勝區トモ謂フ可キ
 上州高崎ヘスヲ日本鐵道會社ハ獨歩シテ起工スル能ハス只管政府ノ
 保護金ニ依頼セシコ非ラス哉是レ未ダ鐵道布設ノ我國ニ緊要ナラサ
 ルノ確証ナリト

嗚呼此漠然タル浮言ヲ爲ス者ノ意ハ唯々鐵道事業チ一ツノ營業トノ
 ミ認ノ唯々直接ノ損得即チ支収ノ金錢ニノミ着眼シテ斷ヘテ前途ノ
 大計即チ間接ノ國利民福ナル無形ノ利益ヲ顧慮セザル井底蛙ノ見ナ
 リト云フヘシ實ニ憐ム可キ哉

鐵道ノ一國獨立ニ緊要ナルハ世界ノ輿論ニシテ其尤モ實際ノ功ヲ顯
 ハシタルハ北米合衆國ヲ以テ最大トス蓋シ合衆國ハ地積ノ廣キ我國
 ニ十倍シ此廣大ナル土地ニテ別ニ帝王ナク人民ノ共和ヲ以テ國ヲ立
 ツ即チ毎年一度國會ヲ開テ各州ヨリ代議士ヲ都府華盛頓ニ集メ全
 國ノ政務ヲ議ス此際若シ鐵道ナカリセハ東西四千余里ニ渉ル各地ニ

リ議員ヲ徵集スル能ハサルヤ昭々乎トシテ明カナリ之ヲ畧言スレハ
 鐵道ナケレハ全國ヲ統轄スル政務ヲ議シ之ヲ施行スル能ハザルベシ
 即チ北米ノ三十七州團結獨立シテ宇内ニ横行スル能ハザルヲナリ今
 此ノ一事ニテモ鐵道ノ立國ニ要用コノ商業外ニ利益ノ無窮ナルハ擧
 テ算ヘ難シ況シヤ直接ノ利ニ於テモ亦少ナカラサルニ於テチヤ
 蓋鐵道ハ此ノ如キ宏大無邊ナル利潤アルガ爲メ政府ニ於テ之ヲ保護
 干涉スルハ開明諸國ノ是認スル所ニテ自由ヲ以テ宇内ニ名アル米國
 ノ如キモ之ヲ保護スルニ厚キハ識者ハ勿論普シ世人ノ知ル處ナラシ
 其他歐洲諸國ノ政府ノ此事業ヲ保護スルニ熱望ナルハ殆ト半開國人
 ノ想像外ニ出ツ而シテ文明ヲ以テ宇内ニ望ム各國政府ノ鐵道保護ニ
 汲々タルハ決シテ妄想ニ出テタルモノニモアラス又々單ニ理論ヨリ
 出テタルコモアラス既往ノ經歷ヲ以テ之ヲ判定シタル明カナリ況シ
 ヤ現今各國ノ議論多ク鐵道事業ハ悉皆政府ノ所有トナスベシト云フ

如キ勢ニテ此ノ如キ議論ノ尤モ盛ニ行ハレ最早此議ヲ實施セシト國
 内既成ノ線路ヲ政府ノ所有ニ爲サント會社ヨリ買上ニ着手セザアル
 ハ文明ノ花盛リ開化ノ率先者トモ言フヘキ英國及ヒ日耳曼ノ實況ア
 ルコ於テチヤ何ソ因循スルコカハ一日ノ姑息百年ノ計ヲ誤ル文明ノ
 利器進テ取ルヘシ開化ノ媒介者充分ニ保護スベシ余先キニ鐵道建築
 ニ緊要ナル工師ノ養育ト工事ニ缺ク可カラサル防害規則等ヲ論シ又
 タ我國コテ布設スル鐵道ノ延長六千英里ヲ以テ差シ當リ標目トシ工
 事ヲ起ス可キ理由及ヒ之レカ建築總費七億二千万圓ナルコトヲ記載シ
 並セテ文明諸國ト同等ノ交際ヲ爲シ日章旗ヲ宇内ニ輝カスコトハ年々
 四百三十英里余宛向フ十四ケ年延線セスノハアル可カラサル所以ヲ
 述ヘタリ略言スレハ毎年鐵道建築資金大凡五千万圓余即チ明治十四
 年度ノ國稅ノ六分ノ五ヲ要スルコトナリ〔工學叢第七、第十一、第十三号
 ナ參看スベシ〕如此巨額ノ金員ヲ現今ノ租稅ヨリ仕拂ハントスルム到

底行ハル可キトニアラズ然レトモ多少國稅ヲ增徴セスンハアララス
 而シテ此巨萬ノ資金ヲ集ルニ各種ノ方法アリト雖何レモ内外ノ關係
 アリ從テ苦情モ多ケレハ彼ノ起業公債ノ如シ鐵道公債ヲ發行シ此益
 支收相ヒ償ハサルキハ政府ニテ助補スベシ即チ公債利子ノ鐵道營業
 ヨリ收入シ金額ニ不足ヲ生シタルキハ斷然政府ニテ支辨スルトニテ
 此補缺費ハ每年豫算シテ廣ク人民ヨリ國稅トシテ徵集スルノ方法ト
 ス然レモ決シテ此法ニ限レルニアラス他ニ良法アラハ速ニ行フヘシ
 余ハ唯鐵道敷設ノ目下ノ大急務ナルトヲ了知シ聊カ愚按ヲ述ヘシノ
 ミ

左ニ字内鐵道ノ里數及ヒ建築費ノ總計ヲ記シテ讀者諸君ノ參考ニ
 供セント欲ス

但シ此調査ハ千八百七十八年米人ノ手ニ成リシモノナレハ其後
 ノ進歩ハ之ヲ推知スルモ非常ノモノナラン

地名	里數(英里)	建築費(弗)	平均壹英里建築費(弗)
北亞米利加	八、四五四〇	四五、三六八〇、三三四九	五、三六六五
中央亞米利加	六〇八	五三六七、九八三〇	八、六八六一
南亞米利加	五九六七	五、七三〇〇、九七〇一	九、六〇三〇
歐羅巴	九、三七九一	一〇四、九八一五、二五一	一一、一九三一
亞細亞	七九三〇	六、一六七一、九四五四	七、七七七〇
亞弗利加	二一〇六	一、一二五七、七八三六	五、三四五六
嶼太羅利亞	二六六五	一、八三二七、三一五四	六、八七七〇
總計	一九、七六一七	一六五、七四二一、四四七五	八、三八七〇

米洲合衆國ニテハ千八百八十一年ノ終末ニハ鐵道ノ總里數拾万千百七十一英里アリ恰モ三年間ニ二万九千九百六十三英里ヲ延線建築シテリ即チ平均一年ノ布設ハ七千三百二十一英里ナリ實ニ驚ク可キ工業進歩ト云フベシ